

5 『ゼノ・かぎりなき愛に』

映画から考える平和の大切さ

○開催目的

この分科会は、昭和5年（1930年）に来日し、第二次世界大戦勃発後も日本に滞在し続け長崎で被爆、戦後以降戦災孤児や災害被災者等の救援活動を行ったポーランド人でキリスト教カトリックの修道士ゼノ・ゼプロフスキー（昭和57年、東京で死去）の生涯を描いたアニメーション映画を鑑賞します。ゲストとしてご参加いただく、製作総指揮をされた千葉茂樹さん（映画監督）の話なども聞きながら、映画を通じて平和の大切さを考えようという企画です。

○開催日時

2月13日（土）10:40～13:10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：15名（参加者10名、
出演者1名、スタッフ4名）
出演者・団体：千葉 茂樹さん（映画監督）



○プログラム内容・成果と課題

1) 長編アニメーション映画「ゼノ・かぎりなき愛に」作品の紹介

この映画は、1998年に「ゼノさんの映画をつくる会」によって製作され同年11月には松竹系映画館で全国公開が行われ、特定非営利活動推進法の施行された時期でもあってボランティア関係者などに反響を呼びました。

本映画の脚本及び監督は故手塚治虫さんの弟子でさまざまなアニメーション製作にかかわってこられた宇井孝司さん、製作総指揮はマザーテレサとその世界などの作品で知られる近代映画協会の映画監督千葉茂樹さん、スタッフは映画の趣旨に賛同した手塚プロダクションやスタジオジブリ作品などを手掛けてきた多くの方々が参加しています。

映画製作費は約1億8000万円。この費用は新聞各紙などで紹介されたこともあって、約1200人からの製作協力会費（収益金から返還）が約6000万円、ゼノさんを知る2000人以上の方々からの寄付金が1億2000万円集まり、映画を完成することができました。

物語は昭和20年8月9日、長崎の原爆投下のシーンから始まります。郊外にある修道院で被爆したゼノさんは、直後から長崎市内で被爆した人々の救助活動などを行います。終戦後、まちにあふれる戦災孤児たちを修道院に集め、救済のための施設運営などを行いますが、東京から疎開していた子ども源太郎の放火によって施設を焼失します。

放火した源太郎は施設を逃げ出し、東京へ戻って上野で浮浪児となっていました、

東京へ出かけたゼノさんと偶然出会い、家族との再会や東京での救済活動などが描かれ、最後は年老いたゼノさんを、更生して医者となった源太郎が世話をするというドラマになっています。(ビスタサイズ 74分)

2) この映画はどのような思いがあって製作されたのか、千葉茂樹さんに聞きました。

映画を製作した 1990 年代の後半は、バブル経済が崩壊して 95 年には阪神淡路大震災が起き、日本全体が政府に頼るのではなく国民一人ひとりや地方や地域が自立していかなければならないという機運がありました。NPO 法ができるなどして、市民同士の助け合いによるまちづくりの実践が求められ、ボランティア活動の推進が訴えられていたところでボランティアの意味を問い直す必要性を感じていました。

ゼノさんはマザーテレサと同様の活動を日本で行っており、昭和 40 年代ぐらいまでは日本人のだれもがゼノさんのことを知っていたのですが、今ではすっかり忘れ去られています。ゼノさんのことを改めて日本の皆さんに紹介することと、ゼノさんの生涯を通じてボランティア活動の原点を考えるきっかけになればという思いで製作しました。

○なぜアニメーション映画で製作しようと考えたのですか？

監督した宇井孝司さんが手塚治虫さんの弟子で、企画の最初から実写よりもアニメーションの方がよりリアリティあるストーリーを展開できるということと、この映画を若い人たちにたくさん見てほしいということでアニメーションになりました。ゼノさんは、生前はずいぶんマスコミなどにも取り上げられ、探せばニュースフィルムなども結構あるのでドキュメンタリーでの製作も考えたのですが、劇場公開の映画にするにはアニメーションの方が実現の可能性が高いとも考えました。

○映画製作で苦労した点はどこですか？

やはり製作費の問題は大きかったですね。なにしろまったく資金のないところからのスタートでしたので、億を超える資金をどうやって準備するのか最初は相当の困難を予想していました。

企画を立ち上げ「ゼノさんの映画をつくる会」ができたことを知った朝日新聞が取り上げてくれて思いのほか反響があり、NHK も特集を組んでくれたりしたことで一般の方々からの資金協力の申し込みが増えたのです。ただ、製作費がすべて集まるには時間がかかると予想して財源確保と並行して製作を進めましたが、どうしても予定の予算が集まらず、本来は 90 分の作品になる予定が脚本を書きなおして 74 分に短縮せざるを得ませんでした。

3) 平和の実現に向けて

○この映画が訴える平和の対するメッセージとはどんな事ですか？

放火して逃げた源太郎を攻める大人たちに、ゼノさんが、悪いのは子どもではなく戦争を止めることができなかった大人の責任であって、子どもたちは守るべきなんだと話すシーンがあります。映画のタイトルの通り「がぎりない愛」の実践ということ

なんですね。これはボランティアの原点だと思います。

映画の中で、戦争は愛する大切な人を失い、財産を失い、地域を崩壊させる恐ろしいもので、どんな事があっても二度と再び戦争を起こしてはいけないという強いメッセージを発信しています。戦災や自然災害で苦しんでいる人々を助け続けたゼノさんの存在は、日本が高度経済成長を遂げる中で忘れ去られていきます。今、改めてゼノさんを思い出すことによって、平和を守ることがいかに大切で、私たち一人ひとりが平和のためにできる事を惜しみなく行動し続けなければならないということに気付いていただければと思っています。



4) 分科会のまとめ

本分科会の参加者からは「ゼノさんのような人が実在したということは信じられない」「戦争がいかに恐ろしいものかということのを改めて考えさせられた」「平和の大切さを語り続けなければ行けないと思った」などの意見をいただきました。

世界では今だ戦争が続いており、テロの危険など日本においても人ごととは思えない状況です。日本の安全保障関連法があらたに法制化され、一歩間違えれば日本が再度戦争に巻き込まれる可能性が取り上げられています。日本の歴史として戦争を経験していることを忘れることなく、安全保障への取り組みが変わることがあっても一人の市民として平和の大切さを見失ってはいけないという意識を共有することができた分科会となりました。

○参加者の声

- 普段だったらなかなか見ない映画アニメを見れて良かった。また、新たな面から平和を考えることができました。
- 自発的なボランティアの心が人の気持ちを動かす大きな力になるということが心に残りました。
- ボランティアの視点から平和について考えるという、関連はありそうでもいざ結びつけるとなると少し考え込んでしまうようなテーマはとても斬新でした。
- 映画の内容はとても良く、心を打たれる内容でした。映画をおつくりになったお2人のお話しも興味深く、熱意が本当に伝わってきました。

○担当者・記録

《担当》	枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）
	阿部 恵美子（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）
《運営サポート》	市川 徹（沿線ボラセン交流会）
《記録》	枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）